

【被災地視察編】

気象キャスターネットワークの被災地ボランティアイベントは、実際に被災地を歩き、話を聞きながら、被災地の今を知るというのもイベントの大きな柱のひとつになっています。

今回は、やまもと語り部の会会長で、震災当時は山下中学校の校長をされていた渡辺修次さんのご案内で、震災遺構に予定されている旧中浜小学校を視察しました。



語り部の渡辺さんは、車体に、写真や資料をマグネットに張り付けながら、

当時の校長が、津波襲来時間など様々な情報から判断し、当初、避難場所とされていた中学校への避難は約20分かかるため、そこではなく、校舎3階にあたる屋根裏の倉庫へ垂直避難をしたことや、約20分の間に4回津波が襲い、「第2波が2階の天井まで到達しました。津波は向こうの山にぶつかり戻ってくる。行きの津波で壊され、帰りの津波でさらに大きく壊される。すさまじい音が響き、体育館も大破」したこと、そして、特に、2回目の津波の引き波の

衝撃が大きかったこと、津波のあとの児童への対応などを語っていただきました。



このあたりは海岸線から約 400m と海から非常に近い場所で、もともとぬかるみやすかったため、校舎を建てる時に1メートルほどかさ上げたそう。そのおかげで屋根裏倉庫まで津波が届かず、命を守ることが出来たとのこと。





夜が明けて3月12日。静まり返った町内に朝日が昇り始めたこの様子は、子どもたちを屋根裏倉庫に避難させ命を守り抜いた校長先生が撮った一枚です。



2階の天井付近にまで津波が押し寄せたことを青いプレートが示しています。



以前は浜辺にあった津波石。



明治に来た津波のことが書かれていました。



海側から津波で陸地に流され、その後引き波で学校まで流されてきた鉄骨。



当時の職員室。



流された時計。



そして、視察の最後にはセンターの岩佐所長から、震災直後に石巻・大須中に校長として勤務していたからこそ見えてきた当時の石巻周辺のお話や、生まれ育った山元町への思いをお話いただきました。



避難所運営など当時のご苦労や経験を、今度はこの山元町の防災拠点で、町民のいのちを守るために生かしていくのだと、決意さえ感じられるお話でした。

参加した海老原美代子さんからは「旧中浜小学校を見学し、押し寄せた津波の高さなど、実際に話を聞き、見上げてみなければ理解出来なかったと思います。また、屋根裏に避難を判断した校長先生の決断力にも感心しました。すぐに避難することの大切さ、その場の正しい決断が多く命を救い、その為には日頃の訓練や知識が大切だと感じました。貴重なお話をありがとうございました。」

また、仙台在住の吉田晴香さんからは「宮城に住んでいて、震災遺構はいくつも見てきましたが、中浜小学校は初めての見学でした。周囲よりも少し高く作ってあること、そして屋根裏部屋の存在など、あらかじめ津波を想定していた建物の構造に驚きでした。何千年に一度の災害を、普段から想定して備えておくというのは、その重要性を分かっているながらも、想像が付きませんし、非常に疲れます。そんな思いに負けてついつい日頃の備えを怠ってしまいがちですが、中浜小を見学したことで、改めて気を引き締めて、いざというときの備えをしなければならないと思いました。そして、中浜小のような事例を、もっと伝えていかなければならないと感じました。」と思いを寄せてくれました。



ちょうど東日本大震災から6年8か月、80回目の月命日に、こうして山元町を訪れたこと。そして、「実際に足を運んでみなければ分からない」からこそ、この山元町を歩いて感じたことを大事にしながら、これからの放送や講演活動などで出来ることをひとつ、またひとつ伝えていきたいと思っています。

この夏から企画をサポートしてくださった山元町の皆さん、そしてイベントに特別に参加して下さった防災士会みやぎの皆さんほか、大勢の方々にご協力をいただきました。ありがとうございました。